

多様なニーズに挑む 岡山協立病院の真価

岡山協立病院の呼吸器内科は多職種が連携し、患者さん一人一人の状態に合わせた診療に取り組んでいます。身近な症状の相談から、肺炎、慢性呼吸不全、肺がん、睡眠時無呼吸症候群、手術後の肺炎予防まで、地域の皆さんが安心して治療を受けられる体制を整えています。

■呼吸器内科で最も多い疾患は「肺炎」

呼吸器内科で最も多い疾患の一つが肺炎です。当院では年間



すぎむら・さとる 岡山大を卒業後、岡山協立病院に就職。初期研修終了後、呼吸器内科の修練を開始した。1993年に川崎医科大学呼吸器内科臨床助手になり、呼吸器感染症を学ぶ。岡山協立病院に帰院後、呼吸器内科・感染症を中心に診療し、気管支鏡検査は3千例を超す。総合内科専門医、呼吸器内視鏡学会専門医・指導医、

医師会産業医。

⑥ 呼吸器内科を中心に、地域の「呼吸」を支える

岡山協立病院副院長 杉村 悟

約250人の肺炎患者さんが入院されます。緊急で気管支鏡検査が必要なこともあります。特に多いのは誤嚥性肺炎ですが、マイコプラズマ肺炎やペットとの接触で発症するパストレラ肺炎など、原因は多種多様です。



気管支鏡検査をする杉村医師（左）

す。

それらの診断のために細菌検査室が血液やたんなどで、どのような菌が肺炎の原因になっているのかを調べます。その結果は迅速に連絡され、医師は抗菌薬の選択や治療方針を決めます。優秀で探求心があり、人柄も申し分のないスタッフがそろっており、私にとっては日本一の細菌検査室です。

■手術前から始まる肺炎を防ぐ



患者を回診する呼吸サポートチーム

取り組み多職種で支えるチーム

胃がんなどの上腹部の手術では、術後に横隔膜の動きが制限され、たんが出にくくなります。

その結果、肺炎を起こすリスクが高まるため、術前からの準備が重要です。その役割を担っているのが呼吸サポートチーム(RST)です。術前から肺機能訓練の一環として吸気訓練器を使い、呼吸訓練の指導を行い、手術直後から呼吸のリハビリの介入をしています。

その結果、術後肺炎はほぼ発生しなくなっています。当院は2000年から呼吸療法委員会を立ち上げ、07年からRSTの活動を開始しました。RSTには医師、看護師、理学療法士、臨床工学技士などさまざまな専門職が関わっています。術後だけではなく、人工呼吸器を使用している患者さんや呼吸状態に不安のある患者さんに対してサポートをしています。近年は、嚥下に障害がある患者さんが多いので、RSTの活動の中で言語療法士の役割がとても重要になっています。

■睡眠時無呼吸症候群や在宅酸素療法にも対応

その他、岡山医療生協全体で70

人くらいの在宅酸素療法をしていますが、その原因になるCOPD（慢性閉塞性肺疾患）や間質性肺炎、肺がんなどの継続的治療やケアが必要な病気にも対応しています。特に睡眠時無呼吸症候群の患者さんは多く来院されます。本人は気づきにくく、家族からいびきや無呼吸を指摘されて受診につながることもあります。適切な治療により日中の眠気や集中力の低下が改善し、生活の向上が期待できます。

当院では年間90人くらいの夜間の睡眠時無呼吸検査を行い、鼻マスクの持続陽圧呼吸療法(CPAP)治療を行います。そして多くの患者さんのその後の治療は、かかりつけの開業医さんに依頼しています。

「これくらいで受診していいのかな」と迷う症状でも、早めの相談が重症化の予防につながることもあります。呼吸器に関する不安があれば、一人で悩まずご相談ください。岡山協立病院はこれからも多職種が力を合わせ、患者さんの暮らしまで見据えた呼吸器診療を提供していきます。

◇

岡山協立病院（086-272-2121）。連載は今回で終わります。